

スポーツ中継の番組編成における緊急対応の変遷 Transitions in Contingency Actions in Sports Broadcast Programming

トップスポーツマネジメントコース
5024A307-7 高橋 良児

研究指導教員 平田 竹男 教授

1 背景

歴代のテレビ視聴率トップ 10 のうち 7 つをスポーツ中継が占めており、放送局の重要なコンテンツの一つとされている（ビデオリサーチ）。このような視聴者の高い期待に応えるため放送局は、スポーツ中継特有の編成上の二つの課題に対応する必要がある。第一に、オリンピックなど複数の競技が同時進行する大会や、競技の勝敗による日程変更にも柔軟に対応しながら、放送時間枠の制約がありつつも、場合によっては他の番組を差し替えるような編成調整が求められる。第二に、雨天中断や延長戦などの事態に際して、番組の延長や中断、他番組への差し替え等の迅速な編成対応が要求される。放送局では一般に、通常の番組編成を大幅に変更し、即時的に対応することを「緊急編成」と呼ぶことがあり、その特徴は事前収録番組とは本質的に異なり災害時の編成対応と共通する側面がある。スポーツの歴史的瞬間を視聴者に届けるためには、魅力的な番組制作に加え、状況に応じた柔軟かつ迅速な編成対応が不可欠となる。しかしながら、スポーツメディア研究において、この緊急編成の対応や実施過程に焦点を当てた実証研究は行われていなかった。

2 目的

本研究は、スポーツ中継の番組編成における緊急対応の変遷について明らかにすることを目的とする。

3 方法

本研究では NHK 総合テレビにおける 1990 年以降のスポーツ中継の緊急編成を対象とし、公開された放送局の記録などの文献調査から放送スケジュールを分析した。緊急編成に至る経緯とその背景（放送技術や視聴者ニーズの変化）について、放送に詳しい有識者への聞き取り調査を実施し、事実や文献調査では把握しにくい実態について補完的な情報を収集した。

4 結果

1) 緊急編成された中継とその理由

1992 年から 2024 年の期間において、NHK 総合テレビで実施されたスポーツ中継の緊急編成は 43 件に上ることが確認された。これらの緊急編成は、その理由により 5 つの類型に分類される。最も多かったのは、注目度の高い試合や選手の活躍に応じて放送を決定した「勝ち進み・注目」で 28 件を占めた。次いで、試合の進行状況に応じた「放送時間延長」が 8 件、他局での放送終了後に NHK で継続して放送する「民放終了後に放送」が 4 件となった。さらに、「放送枠先行確保」として放送枠を先に確保し、その後に具体的な放送内容を決定したケースが 2 件、「BS 中継の総合テレビ録画放送」として、BS での中継を総合テレビで録画放送したケースが 1 件であった。

2) 緊急編成の方法とその時代的变化

緊急編成の実施方法は、放送技術の進展とともに変化してきた。1992 年から 2000 年代は予定番組の差し替えを中心とし、試合延長時の後続番組内での継続放送（ワイプ演出を含む）も行われてき

た。その後、オリンピックなどでは長時間の放送枠を設定し、競技の入れ替えによって対応する方式が採られた。2011 年の地上デジタル放送への移行完了（一部地域は 2012 年）により、1 つのチャンネルでメインとサブの 2 番組を同時に放送する「マルチ編成」が可能となり、2017 年以降の緊急編成では 17 件中 13 件で活用されていた。また、2008 年の北京オリンピックでは、放送計画発表時に「競技スケジュール次第で変更あり」と事前に告知されるなど、スポーツ中継の不確実性に対する対応が進められていた。

3) 緊急編成の事例

①差し替えによる事例・初めての緊急編成

・緊急編成の内容（文献調査）

1992 年のアルベールビルオリンピック・ノルディック複合団体の中継は、公開情報を基にした筆者の調査によると 1990 年以降、総合テレビで初めて実施されたスポーツ中継の緊急編成であった。

日本時間の 2 月 17 日（月）の夜、ノルディック複合団体の前半であるジャンプで日本チームがトップに立った。総合テレビでは当初予定していなかったが、翌日 18 日（火）の後半である距離競技が生中継されることとなった。総合テレビで 22 時 30 分から 23 時 59 分まで緊急生中継を行い、当初予定されていた「プライム 10」は移設され、「ミッドナイトジャーナル」は休止となった。「朝日新聞」1992 年 2 月 20 日朝刊の記事には、「視聴率は 25.1%と高視聴率を取った（ビデオリサーチ調べ）。メダル獲得の可能性が高くなったため、通常の番組を休んで生中継した。NHK はこの時間帯は通常 3%前後だが、一挙に民放のゴールデンタイム並みの視聴率になった。またテレビをつけている人も 46.3%と夕方並みだった」と記載されていた。

・緊急編成の決定の経緯（インタビュー調査）

ジャンプ終了後に、現地放送班からの情報を踏まえ、オリンピック事務局や報道・編成部門での調整を経て、緊急編成が実施されたとされる。総合テレビでの放送が可能であったことや、1972 年札幌オリンピック以来 20 年ぶりとなる金メダル獲得の瞬間を視聴者に届ける意義があったと考えられ、これが緊急編成の要因の一つとみられる。番組の差し替えについても、編成上の調整により、「プライム 10」の移設や「ミッドナイトジャーナル」の休止といった対応が取られたとされる。最終的に、この対応によって視聴者に金メダル獲得の瞬間が届けられた。

②延長のため放送枠を拡大した事例

・緊急編成の内容（文献調査）

1994 年 FIFA ワールドカップ（以下、W 杯）決勝のブラジル対イタリア戦は、NHK 総合テレビで早朝 4 時 25 分から放送を開始し、6 時 25 分に放送終了予定だったが、延長戦および PK 戦が続いたため 7 時 20 分まで放送された。朝の視聴者ニーズが高い「ニュース・天気予報」の定時性を確保するため、W 杯中継を一時中断し、6 時 25 分から 6 時 28 分、7 時 4 分 30 秒から 7 時 6 分 30 秒にワイプ画面で試合映像を挿入しながら「ニュース・天気予報」

を伝えた。6時50分からの「天気予報」については、試合映像を背景に、各地域の放送局が天気情報を文字マーク情報で伝えた。さらに、7時からの「NHK ニュースおはよう日本」を中断し、W杯の中継を7時20分まで延長して編成した。「NHK年鑑'95」によれば、「決勝戦の5時までのテレビ占拠率は86.3%、PK戦（7時16分から7時18分）の瞬間最高視聴率は26.5%で日本でのW杯史上最高（ビデオリサーチ 関東地区）」と記載されていた。

・緊急編成の決定の経緯（インタビュー調査）

「ニュース・天気予報」を担当する報道部門、W杯中継を担当するスポーツ部門、編成を統括する編成部門の間で調整が行われ、試合中継が中断された「ニュース・天気予報」の間にはワイプ画面を用いた対応が行われたとされる。終了のタイミングについても放送枠の調整を踏まえ決定されたとみられる。

③マルチ編成の事例

・緊急編成の内容（文献調査）

2017年7月3日（月）ウィンブルドンテニスで錦織圭選手の試合中継は、総合テレビでマルチ編成により、サブチャンネルで21時から22時25分まで試合が放送された（メインチャンネルでは「ニュースウオッチ9」および「クローズアップ現代+」を放送）。22時25分から22時45分まではメインチャンネルで試合が放送された（「プロフェッショナル仕事の流儀」は翌週に変更）。

5 考察

1) 変化した緊急編成の内容

約30年の間に、緊急で放送されるスポーツ中継は、他番組を差し替えて行う方法から、事前に枠を確保し、放送内容を柔軟に決める緊急編成が取り入れられるようになった。さらに、マルチ編成の活用も進み、他番組の影響を最小限に抑える対応も加わり、変化してきた。事前スケジュールの段階で変更の可能性をあらかじめ周知することや、広く編成可能な枠を確保することで、他番組の休止による影響が軽減され、緊急のスポーツ中継をより円滑に放送できるようになったと考えられる。さらに、技術の進化に伴い、マルチ編成の活用が進み、差し替えとの併用を含めた柔軟な運用が広がり、緊急編成の実施が従来よりも柔軟になった。

2) 緊急編成で放送された中継の特徴と編成

緊急編成で放送された中継は高視聴率を記録するケースが多く、目玉番組であっても、あらかじめ休止を伝えることで視聴者への影響を抑えながら放送が行われていた。また、一度中継した内容

をそのまま放送するだけでなく、後日、録画内容を他の取材と組み合わせる編集し、特集番組で放送するなどさまざまな形で再活用されていた。技術が進化しても、差し替え番組への対応や緊急編成の最終決定は人が担うものであり、編成に関わる人の柔軟な対応力や事前の調整力の重要性は変わらないことが確認できる。

3) 今後のスポーツ編成

緊急編成に至った中継の多くは、放送権を持つ競技であったが、編成段階では勝ち進みや試合の注目度が当初の想定を超えたため、急ぎ差し替えが行われた事例が見られた。現在も地上波放送はスポーツ中継において重要な役割を果たしており、特にオリンピックのような国民的イベントでは、多くの視聴者が地上波を通じて視聴している。一方で、インターネット配信によるスポーツ中継が行われる機会が増え、地上波の放送とは異なる形で編成の選択肢が広がっている。NHKのインターネット活用については、放送法の枠組みに基づき運用されており、その在り方について議論が行われている。インターネット配信には一定の制度的な制約が伴うため、放送と配信の役割や連携の在り方については、引き続き多角的な検討が求められる。今後の技術革新や視聴環境の変化を踏まえ、編成の柔軟性を確保しつつ、状況に応じた適切な対応が重要となる。

本研究では、主に公共放送における緊急編成を対象として分析を行ったが、民放やインターネット配信サービスにおける緊急編成についても、さらなる事例の収集と分析を通じて、より包括的な研究を進める余地がある。

6 結論

本研究は、スポーツ中継の番組編成における緊急対応の変遷について、1990年代から2024年までの43件の緊急編成事例を分析した。緊急中継の編成手法は、当初は他番組を差し替える手法が主流だったが、事前に放送枠を確保し放送内容を柔軟に決定する手法が取り入れられ、さらに必要に応じた適切な範囲で地上デジタル放送のマルチ編成機能も活用することで、より柔軟な緊急編成が可能となった。一方で、放送技術が進展する中でも、代替番組の選定や緊急編成の最終判断においては、人的判断が重要な役割を担っており、編成担当者には迅速な状況判断力や関係者との調整能力が求められていた。これらから、スポーツ中継における緊急編成の効果的な実施には、柔軟な運用体制の確立と編成を担う人材の育成という二つの要素が重要であることが示唆された。

